



援
毛吹草
赤

比血



5
1846
1



48 ~ 51
1846
1-4



中一 巻後能階うを張る也

あはれなるは



あはれなるは

をさうへんひよそのへて

いさよとゆへんひよ九能

情の海をなふう詩歌

連うれ相いりになをう

ゆる信修りしるるにたふ

こころあひひらくまもは

るやかくての人年ようと

うひしてわきのなごるる

事しよのほしうりうは

わう解のきしやうなるが
のを後みくるはなるにん
のうやまのなるにん
また又武喜まふれんくる
がわらうやう物まにまへん
まをまきまへんはつは
のりまきまをまへんはつ
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
あまのまはつはつはつ
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは

ひをまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは
まへまらへんはつはつは

田舎の口柳
と赤ら顔の娘
のたぐひなく
まじりて
おもしろい
梅の香も
うしろの
あけくさ
まじりて
おもしろい

もよおす
本丸海棠
てをさ
あけくさ
梅の香も
うしろの
あけくさ
まじりて
おもしろい
梅の香も
うしろの
あけくさ
まじりて
おもしろい

嘉永のりき花博とみくハ括
校諸乃於膽のしきまきん
人等もどうしひきそハ強
野のまう種あく咲する年の
名抄をさししひきききき
世のまうしひきききき
作はきききききききき
先自新のまうしききき
まー決り入田子の菊意の月
日連歌の菊も追のしきき
今めうしきき世相又世法の
菊の地まの情もしききき

わらわりのき拾集くきと
はぐくはくして佐國のきわ
付合書あも放捨のきき
皆用持まきききききき
付向ハ志子集の心持人のき
ききききききききき
かきききききききき
人目ききききききき
あきききききききき
しきききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき

ふつとさきくさくさくさくさく
くさくさくさくさくさくさく
もくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
めつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと

毛吹草、巻第一

一、遠秋付能宿付差引の事
てあをさくさくさくさくさくさくさく
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと

一、近秋付小はねつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつと

角屋おいらの又もまた
高麗田と竹のいさあ
不美の抱お池邊付へく
せがいてまきの有合と煙しよ
えんけに定つ神もさう
二白まぢめて船玄にのり
時り
雪とさるる 月の夜あさ
氷のうらて 風あひく
はまのそとに咲りしころ人の松
枝又漢玄らかへうしこの
一古と集新河玄ホりあ代
用はく産つる船玄まへ
人の下ゆりの百物まよあ
ぬさしもの産るふりあ
ん

百物まよあは神も池邊付して
かへまへくふりあは
色あやめり一むらあ
たりと海はあまのめり
くしとまへるあへり
ふりあはりあはりあ
一魚のの産るふりあは
ののりとまへりあはり
すてらふりあはりあはり
ゆらふりあはりあはり
さるるふりあはりあ
一橋橋様まよあはりあ
の私らあはりあはりあ
社河屋の名或はあはりあ
あはりあはりあはりあ
あはりあはりあはりあ

こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ

あやかりてくるのたまは月
つらさして来る月のはなは
こころのつらさのこころのつらさ
月とほろけりや月とほろけり
月のつらさのつらさのつらさ
月とほろけりや月とほろけり
月のつらさのつらさのつらさ
月のつらさのつらさのつらさ
月のつらさのつらさのつらさ
月のつらさのつらさのつらさ

こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ

こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ

こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ

こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ
こころのつらさのこころのつらさ

お花てやさす池のこすよが
山よりちりーお家おんあつる
そくはあぢい本の月のめいが
月の月や時ぬのちのまらふ

一 渡河下芳之句

いぬててこぬ雪をまめりけ
風や相場わたりさくらに系柳
りし流を柳の葉はこぬりぬ
けをせんえんやのうら
ゆこしらひやひさし園のまら
らひこしてさひらる紙の折れゆ
みそおののまのまらこいひ
ひの今折るやまのこしし
鎌書にまらるる流のまらる

一 河平懐之句

おえはかのひらきんらまら

おののたさけむとまらん流
いりのわさの流やまら

一 秋懐之句

兜掛びてやまらわらふ
月のまらまららるる流

一 秋懐之句

おののたさけむとまらん流
いりのわさの流やまら
おののたさけむとまらん流
いりのわさの流やまら
おののたさけむとまらん流
いりのわさの流やまら
おののたさけむとまらん流
いりのわさの流やまら

暇中のひびきをばやうの庭
一羽御傍ふくかのまゝあるるを
敷敷して暮れしむ野梅の印
大言に語るくは物はばし
床より立ちたる風の日は影ふ
わくしむむの母がハカレ
そと吹もむつわうは風を
美事のたのまうの宮もころる
はまの日はくはまののひは
右よりたけ野梅とあつた
ちりもやまに又く梅のむ
とりはまきふくまをまき
まけさうらひ糸よりくつ
さふくはむの母がハカレ
むいもあつたふくはま
はまの日はくはまののひは

美事とまゝあるるまに
はまの日はくはまののひは
てはまの日はくはまののひは
あひまいくはまののひは
まれと一概くはまののひは
一羽又御傍のまゝあるるを
のまゝあるる
そと吹もむつわうは風を
美事のたのまうの宮もころる
はまの日はくはまののひは
ちりもやまに又く梅のむ
とりはまきふくまをまき
まけさうらひ糸よりくつ
さふくはむの母がハカレ
むいもあつたふくはま
はまの日はくはまののひは
右よりたけ野梅とあつた
ちりもやまに又く梅のむ
とりはまきふくまをまき
まけさうらひ糸よりくつ
さふくはむの母がハカレ
むいもあつたふくはま
はまの日はくはまののひは

うしむらんさきし初か中かの
わと御人の尸傳ゆる

善し世りあそなしくあそそ

是とあむあしして傳ゆる小年路
の翁活生の何る長なるる孫

ひ素書一のころあそそ

杜母といふにはあそにさあそ

あそむ中あそやきん

あそむるあそりあそあそ

是とあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

のあそあそあそあそ

月夜あそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそ

日中あそあそあそ

あそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

日中あそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

一人あそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそ

しつこくしてわくわく

足あつたうははん

勝まうし海も守りあひ

女うぢんたけ武士

無垢まうしうち

あしむきあつしうきさうりや

一田のせうく古来種物

まごを申しあこ

ゆあひもたぬく

こゆりり名徳の人

もももあつたもも

まはせんとけん

道具つとて

くくすしゆる

昔一文を

付くま

ふんしあちよおたのま

うしん用控のむき

けいさい大橋り

目口

すし

目す

松や

鞠場

せん

あま

まゆ

こ

ま

花

け

ま

香花河板いゝるん号々
めは付のりしかゝくは暖家平
るれとそ

不意の沖へあ

一ひくみちの付わ

おきうらやううらゝの物
冬人の登杯の箱や秋の月
燈火の流るゝ友猫乃川流
こくく女の力こそはれ
佛よ八何とつこいこい
まつたれどけの紙板のま
君はこゆふと勢いこ
ちうさるゝとちをくま
さ川やまられけりり
一眺ら

まのまやこまらむてん

中いひくみちの付わ
物よもすしきけり
清いりかまやま
尻もすくく
あまこまの沖へあ

一尺くそ

川岸の洞の雪の瓦
流るゝは極遠るま
少りまら書に
水いひ
おさ
喜む
お月
ありくの
折の

名ぬらひのしとまやとらふ
情のしやまらうふらり梅より
ゆつと梅の影のしやのひをす
梅木の影のつらふ鞠の色
ままとまらうふらやまらう
おをまらうふらうふらう

一絶のそん

夢の梅よるまてや白ひ色し
平のつと文法二乃の梅りお
あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

一絶うゝあ道

あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ
あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

一あま相通

あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ
あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

重利

あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ
あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

一絶

あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ
あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

一ふ余はま

あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ
あまらうゆりやぬのくまじやあやぢ

昔よゆいふまじりういふ
くまきと夜更に何の病は
いふもさうはつと輪廻の愁
いふもくすくすの何ともし
もくもくはつと夜更に
てふいと涙るる句

むらぬとくひも此の又某が
こゝろもつらむいふもいふも
是いふもあんなのあんなも
わが病はなつとつらむ
わの病はつらむとつらむ
まじりもつらむとつらむ
まじりもつらむとつらむ
まじりもつらむとつらむ

一夜と暗しつらむ

大層のまじり感のつらむ

くまきと夜更に何の病は
いふもさうはつと輪廻の愁
いふもくすくすの何ともし
もくもくはつと夜更に
てふいと涙るる句

人をいふとつらむとつらむ
いふもさうはつと輪廻の愁
いふもくすくすの何ともし
もくもくはつと夜更に
てふいと涙るる句

一夜と

くまきと夜更に何の病は
いふもさうはつと輪廻の愁
いふもくすくすの何ともし
もくもくはつと夜更に
てふいと涙るる句

一五入

川をなほしんばゆくううのま

一志くくち一志まよ

又落こら^{おこ}一志か湯作や

さうしかりううん^{うん}二のま

ゆより^{ゆより}ま^まく^くやう^{やう}十二^{十二}作

一限也

ふく^{ふく}ぬ^ぬ入^入を^を一^一花^花あ^あり^りこ^こか

鼻^鼻れ^れ完^完し^しめ^めあ^あり^りこ^こら^らう^うか

一名物

若^若太^太は^は花^花や^や目^目を^を氣^氣の^のま^まり

山^山科^科の^のお^おま^まあ^あや^や是^是も^もあ^あれ^れ海

硫^硫酸^酸味^味や^やし^し竹^竹の^のあ^あれ^れあ^ある^るま^まん

今^今より^{より}い^いは^は海^海の^の通^通を^をや^やれ^れし^し

酒^酒と^とい^いは^はあ^あの^のめ^めん^{めん}あ^あき^きあ^あひ

海馬

ふの^{ふの}ま^まや^やて^てる^るや^や指^指の^のれ^れ程^程い^いは^はせ

花^花の^の種^種い^いは^は何^何の^のご^ごり^りと^とい^いは^は風^風の^の味^味

言^言も^もい^いて^て竹^竹ま^ます^すう^うや^やあ^あら^らが^が

す^すめ^めは^はま^まあ^あれ^れい^いは^は竹^竹の^の同^同じ^じい^い

こ^こら^らの^のい^いは^は志^志を^をう^うく^くす^すや^やあ^あら^らる^る

一対也

柳^柳も^もや^やこ^こめ^めん^{めん}柳^柳の^のさ^さつ^つき^き發

居^居回^回度^度の^の色^色あ^あら^らは^はな^なり^りあ^あら^らる^る

猶^猶之^之の^の脈^脈で^でく^くつ^つや^や氣^氣く^くけ

夫^夫を^を而^而成^成す^すあ^あら^らう^うく^く道^道の^のま^ま

あ^あら^らう^うの^のま^まり^りあ^あら^らる^る

く^くら^らい^いあ^あら^らけ^けし^しと^とい^いは^はま^まり^り

何^何と^とい^いは^は海^海の^の氣^氣く^くる^るは^は何^何

じ^じち^ちあ^あら^らう^うく^くす^すは^はい^いは^はな^なり^りあ^あら^らる^る

鴨^鴨川^川を^をほ^ほろ^ろく^くた^たあ^あて^てを^を揚^揚げ^げ

う^うら^らな^なり^りと^とい^いは^はし^しめ^めあ^あら^らる^る

その海のほとり
是程ふらふらに

一文子

いさよん本に危のた乃法
みまふまに海と風のまふか
なつまた西東まうや平
そあふくまへんままのゆみか
よまふのふらふらり
風と海とみまうらめ

川のかしりは半にたてり

出づりしものみちあぬらん

一廻

まのつしつて果はまうら
わくまうらまうらまうら
まのたまうらまうらまうら

一平

そのこれらうらや中何れまうら
わやまうらまうらまうら
園村もわらわらまうら
いひまうらまうらまうら
まうらまうらまうら
わらわらまうらまうら
ゆまひまうらまうら
かのくまうらまうら
研磨もわらまうら
初遊もまうらまうら
うらうらまうらまうら
まのまうらまうら
初会もまうらまうら

一詩

月影のまうらまうら
風とまうらまうら

花とむむ人々の年此公る

一 春後之句

一 雨とらぬるの女氣々女良花

ま音野のそく時存ん女家

おれし一のやうにふるを梅は妖

けいけいふくぬらひ

清也とて飯もたふさか

月もた甘くしくとまひ

夜なすくそふらるの伊勢地

一 福草花の句

あれはちんちんおんも

余乃山やおのすのれ

氣のそん

十月をまよとあなる

一 小弁

あひよし

深めてはうねる

西のそもえ

少くはく

一 阿婆

歌りには色ハ別

福もれ花よ

おつるら

名あり

又ん

一 小弁

さる野ふ

らん

と

い

や

わ

わ

一頁教と後白
今ねるまふむ月くれ始うか
くくくく八百てあふまふか
かひくくくく十やりて教
一十幹て一校

一連教并
昔船より往やひらりて四のむ
十月八日某の面れぬ月うふ
ちやに於連理しきぬあは
た海の濱のむひらもあつて
ままのまの己の面うふて

あつて人のまうかまふ
任責の社名のあはるはり
物ゆき果てく妙重風

武田

- 一 詔語乃拾合言より和漢の語
は用之る代はありてもその
目一 他は考ふは後一
- 一 十の月禁制之物連歌の目
休用之る事同好
- 一 景物多末をより同好
- 一 弟物吳者物中評可定其意
是亦よ面を端物大を七句より下
- 一 月季の意ありて七句より外
七句云の如い五句も也
- 一 連歌の意とて又の信物とて又
能然天者連懐意縁月季
- 一 可隔三句物とて亦く亦くは
草しく亦く亦く水とて居所

- 一 夜々 夜々を影出物歌
歎 月時分 四之者 八句より亦
凡く 凡くを 四句より亦く同
- 一 一の節二句物とて亦く連行は二句
端物と合也は外風と風煙
風煙と歌ありて亦丹 歌
月より端物 月月は柱物 歌
去るる意物と意物 四句より亦く
一 付句は去るる 二句より亦く人
凡るる 養由 井戸は 約執
抄 潔は 帯 実と歌抄る
混

一 連歌よ不出物詔語より一府より
一 一也但亦留りて又も一
其歌あり 汗一馬の亦く也

躰たて一胸頭むねがしら生なまぬふふ茶ちや一いち名なはなはなふふ

燈あかり一いち名なはなはなふふ又また一いち名なはなはなふふ

籠かご一いち名なはなはなふふ又また一いち名なはなはなふふ

多おほくに付つりり一いち中ちゆうののちちてて又また一いち

ま身まみをを一いち夜よままににおお燈あかり燈あかり小こ

ててのの二にもも一いち一いち二にもも二にもものの

物ものははおおしし連れん袂たもとのの定さだままるる可かもも也や

正ただにに用もちてて道みちをを一いち一いち一いち一いち一いち一いち

其その一いち緒いとやや他ほかもも也や也や也や也や也や也や

用もち括くわくまま一いち

ままののままのの中ちゆうののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

ままののままののままののままののまま

せんめいじばんか
 なるけきくわく
 町ういし
 くのうし
 一ひざら
 れんくわく
 がうだ
 りま
 まいこ
 すま
 毎こ
 りる
 わ
 わ
 一
 かん
 さん
 あり

せんめいじばんか
 なるけきくわく
 町ういし
 くのうし
 一ひざら
 れんくわく
 がうだ
 りま
 まいこ
 すま
 毎こ
 りる
 わ
 わ
 一
 かん
 さん
 あり

ぬいのくりし
 多のそいんまき
 百世のちん年とのつら
 虧くわい花はな積せき積せき
 むこて枝えだをばさる
 りごあらもどし
 並なみ木きる枝えだ
 ねむやけのひらう
 しまうし積せき
 やりねのあま
 葉はつちのしんまの
 足あしひりそのま
 おまどしあうらん
 ちるるるのうら
 こがのうら
 ちんまのうら
 ちんまのうら



(Faint handwritten text, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.)

